

「五つの力」評価対象事業の実施状況

事業名：もりの学舎ようちえん	体感する力
成果（アウトカム）指標例： 新たな気づきや発見が得られたか等	
事業概要	
未就学児童とその保護者を対象として、愛・地球博記念公園内の「もりの学舎」及びその周辺で、インタープリターと一緒に自然を体感してもらうプログラムを年間 6 回にわたり実施するもの	
「五つの力」を育むために工夫した点	
五感を使って楽しく自然を感じられるような体験型のプログラムを実施している。	
事業の実施により見られた学習者の変容（事業担当者の視点から）	
<ul style="list-style-type: none"> ○ インタープリターの働きかけにより、虫が苦手だった子が楽しく触れるようになったり、どんぐりを食べることで森の恵みを知ったりと、自然を楽しく体験することができるようになった。 ○ 保護者も幼児とともに自然を楽しむことができおり、事業終了後も継続的に自然とかかわりを持ち続けることが期待できる。 	
上記を踏まえた今後の改善策（案）	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 引き続き、五感を使った体験を重視して、プログラムを継続していく。 ○ 平成 29 年度は親子 24 組に対して一括実施していたが、ゆとりをもって個々の参加者と接することができるように、平成 30 年度は親子 15 組ずつを 2 班に分けて実施した。このことにより、幼児の様子を見ながらより適切な対応が取れるようになったため、次年度以降もこの方式で実施していく。 ○ 事業開始時に、保護者に対して幼児の特徴を踏まえたインタープリターの関わりへの要望に対するアンケートを取るなど、個々の幼児へのさらなる対応をしていきたい。 ○ これまで、各回ごとに参加者にアンケートを実施していたが、幼児連れの保護者には負担が大きかったため、各回ごとのアンケート内容はごく簡単なものにとどめ、最終回に成果指標の達成を含めたより詳細なアンケートを実施することとしたい。 ○ 本事業を受講した幼児が、本事業終了後に、環境に対する意識や行動にどのような変化があったかを把握するため、事業実施後半年を目安に、事後アンケートの実施を検討する。 	

事業名：プラザ環境学習講座	理解する力
成果（アウトカム）指標例： 環境問題を自分のこととして捉えられたか等	
事業概要	
小中学生向けに、地球温暖化や酸性雨など、実験を交えた体験型の環境学習講座を実施するもの	
「五つの力」を育むために工夫した点	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 講義だけではなく、実験を含めることで、環境問題に関心をもってもらえるようにしている。 ○ 講義のまとめとして、「私たちにできること」を受講生自身が考える時間を取ることで、自分の生活が環境問題の解決に大きくかかわっていることを実感してもらった。 	
事業の実施により見られた学習者の変容（事業担当者の視点から）	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 受講生は興味をもって環境問題について学ぶことができおり、環境問題を自分事としてとらえることができているようであった。 ○ 受講者アンケートの項目の「これから実施したい自らの行動」に関して、ほとんどの受講生が具体的な行動を記載しており、環境問題に対する取組の継続が期待される。 	
上記を踏まえた今後の改善策（案）	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 実験を含めた講座を1時間前後で実施することで、時間の不足により丁寧な説明ができないケースがあった。時間が不足する場合には、説明や実験内容を削るなどしてでも、まとめ部分の「私たちにできること」を考えることを重視していきたい。 ○ 講師を務める職員が、毎回、変わる可能性があるため、講座実施時のポイント、重視したいこと等をグループ内で共有しておく。 	

事業名：高校生環境学習推進事業	探究する力
成果（アウトカム）指標例：物事をほかの側面から捉え、次の疑問や課題を見つけられたか等	
事業概要	
<p>高校生が、大学・NPOなどの支援を受けながら環境問題に関するテーマを調査・研究し、その結果を基に地域に向けた環境学習教材を作成・普及するもの</p>	
「五つの力」を育むために工夫した点	
<ul style="list-style-type: none"> ・高校生グループそれぞれに、アクティブラーニングを熟知したファシリテーターを付け、ファシリテーターは、答えや解決法を出すことを急がず、高校生自身から疑問や課題が生まれるような問いかけを行った。 ・環境学習教材の作成において、実現可能性よりも、高校生の発想を大切にし、それを形にしていくことを重視した。 	
事業の実施により見られた学習者の変容（事業担当者の視点から）	
<p>・当事業は、学校の教師が主導して参加してくることが多く、事業開始時、高校生は先生の指導に従うといった受け身の態度であったが、高校生の発想・意見を受け入れていく姿勢で事業を進めた結果、高校生がテーマについて主体的に様々な角度から考え、自ら課題を見だし、グループ員で協力しながら、調査・研究、教材作成を進めていく姿勢が見られるようになった。</p>	
上記を踏まえた今後の改善策（案）	
<ul style="list-style-type: none"> ・高校生がさらに主体的な態度で事業に取り組むよう事業開始時のキックオフミーティングを高校生のモチベーションを高めるような内容とする。 ・事業開始時に、生徒を引率する高校の教師に対し、「教員主導ではなく、高校生の主体的な取組を最優先にする」という意識を徹底することとする。 	

事業名：持続可能な未来のあいちの担い手育成事業	活用する力
成果（アウトカム）指標例：自分のすべきことに必要な知識やスキルに気づいたか等	
事業概要	
<p>未来のあいちの担い手となる大学生が、グローバルな視点を持って継続的にエコアクションを実施できるよう、パートナー企業の環境課題に対し、現場調査や企業担当者とのディスカッションを実施して解決策を考え提案するもの</p>	
「五つの力」を育むために工夫した点	
<ul style="list-style-type: none"> ・持続可能な社会に係る主要なテーマについて、活動初期に講義を行い基礎的な知識を与えるプログラムとしているが、一方的な講義ではなくワークショップ形式とし、主体的に考え、気づきの場となるようにしている。 ・研究活動の各プログラム終了時には、ふりかえりと今後すべき事をまとめると共に発表を実施し、各時点で今後すべき事、必要な知識やスキル等を認識させるようにしている。 ・中間発表等、成果発表までの途中段階において、チームごとに現状の解決策を発表する機会を設けた。ここでは、研究員が他チームの発表に対しお互いに意見を述べることで、自分達の活動を客観的に見つめ、他人の意見から自分達の気づきを得る機会としている。 	
事業の実施により見られた学習者の変容（事業担当者の視点から）	
<ul style="list-style-type: none"> ・研究活動が進むにつれ、チーム内・外で活発に議論、意見交換を行っており、お互いに活動の質を高めている様子が見られた。 ・中間発表においては、研究員が他チームの発表に対して質問だけでなく、良い点やわかりにくい点等を積極的に発表し、お互いに研究内容の質を高めるとともに、自分達の研究を客観的に見つめることにより、今後の課題やすべき事を改めて認識していた。 	
上記を踏まえた今後の改善策（案）	
<ul style="list-style-type: none"> ・研究員、パートナー企業、ファシリテーターに事後アンケートを実施して得られた意見も踏まえつつ、研究員が自発的に必要な知識を得て、考え、それを行動につなげられるような環境リーダーの養成としての研究所プログラムを引き続き実施していく。 	

事業名：環境学習コーディネート事業	共働する力
成果（アウトカム）指標例：他者と共働することの価値を感じられたか等	
事業概要	
学校等からの依頼により、環境学習コーディネーターが、環境学習等に関する講師・場所等の相談・紹介や学習内容の調整を行うもの	
「五つの力」を育むために工夫した点	
<ul style="list-style-type: none"> ・事業を通して「共働する力」を育てていくということを念頭に置いて事業に関わっていくため、事後アンケートに以下のような項目を盛り込んだ。 <ul style="list-style-type: none"> ○ 共働で講座づくりを行うことの良さややりがいを感じられた ○ 依頼側との共働により、自身のスキルアップにつながった ○ 共働する際のノウハウやコツを知ることができた ○ 今後は直接のやり取りが可能／今後も一部サポートをしてほしい ・打合せ時に「協働授業づくりハンドブック」を紹介しながら、コーディネート事業での講座実施は、依頼側と講師側とが一緒につくりあげていく「協働授業づくり」であり、定型プログラムであっても依頼者のニーズによって実施方法が変わってくること、両者の関わり方次第で成果が変わってくることなどを理解いただくよう心掛けた（年度途中から）。 ・打合せ時に、「依頼者、講師が直接やり取りできることを奪わないのがコーディネーターの原則」ということ伝えた（年度途中から）。 	
事業の実施により見られた学習者の変容（事業担当者の視点から）	
<p>打合せを通して目指すところを共有することにより、他者との共働により生み出される価値を具体的にイメージできたことから、積極的に歩み寄る姿が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師側が、依頼側のニーズに合わせた提案や内容のアレンジを行っていた。 ・依頼側（教員等）も板書や指名等で講座に関わっていた。 ・依頼者が自らできることは、積極的に行っていた（「教材の購入や講師謝金・旅費、正式な講師派遣依頼文書等が必要な場合、ほとんどのケースで依頼者が対応した」「依頼者が、打合せで自らのニーズをしっかりと伝えられなかった反省を踏まえ、次の打合せでは具体的な要望や講座の素材を講師側に提示していた」など） 	
上記を踏まえた今後の改善策（案）	
<ul style="list-style-type: none"> ・共働に係る連絡・調整についてのノウハウ・コツを学び取っていただけているため、引き続き打合せの場などで、「コーディネーターは、協働授業づくりのため直接やり取りできる関係の構築を目指し、伴走支援する制度である」ことを依頼者・講師側と共有していく。 ・多くのケースで共働のメリットを実感いただけたことから、より多くの方に利用していただけるよう事業の認知度を高め、新規顧客の開拓につなげていく。 ・アンケートで「今後も一部サポートしてほしい」と回答した理由が、「講師情報はあっても、実績が分からないと不安」であったことから、参考情報として過去の事例を見やすく公開し、新規顧客が安心してコーディネートを依頼できる環境づくりを進める。 	